

由利本荘市 令和2年度完了報告書

1. 調査研究概要

(1) 調査研究の内容

【a 学校の教育目標等の設定及び実現に向けた取組】（由利本荘市立西目中学校）

昨年度は、学校で育成を目指す資質・能力を見直し、「創造力」に決定した。今年度は、「創造力」の育成に向けて、主に以下の3点に取り組んだ。

① 教科等横断的な視点での「創造力」の育成

教科の枠を超えて「創造力」を育むために、どの教科でも問題解決型の学習を意図的かつ継続的に行っていくことが、教科の目標の達成や資質・能力の伸長とともに「創造力」の育成につながることを確認し合い、実践に取り組んだ。また、他教科等との連携を図りながら授業を構想するよう努めた。

② 生徒や地域と共に育成を図るための施策と評価・改善

「創造力」を生徒も意識できるよう、年度当初に各教室にパネルを掲示した。また、集会等で「創造力」育成の必要性や生徒への期待感を伝え、「創造力」を基にした生徒会活動の活性化へとつなげた。加えて、各教科等において、関係機関や地域人材の協力を得ながら「創造力」の育成に取り組んだ。

③ 総合的な学習の時間の再編とカリキュラムの整備

昨年度作成した「創造力に関わるカリキュラム」上に、各学年の総合的な学習の時間のテーマと関連する単元を精選しながら線で結び、他教科等との学びのつながりを全ての教員が意識できるようにした。そして、これを基にして、各学年の総合的な学習の時間の指導計画を再編した。

【b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究】（由利本荘市立西目小学校）

昨年度に引き続き、学習の基盤として重点的に育成する資質・能力を「学びの価値を見出す力」「論理的な思考力」「考えが伝わる表現力」とし、主に以下の3点に取り組んだ。

① カリキュラム・デザイン表を活用した単元等の精選と重点化

生活科及び総合的な学習の時間との指導内容の関連度に応じて、カリキュラム・デザイン表に掲載する単元・題材等を精選した。その上で、生活科及び総合的な学習の時間を核としながら、教科等横断的な視点で重点資質・能力を育むために適する単元等を探り、重点化を図った。

② 長期・短期のPDCAの連続的な展開

研修会議や研究協議会では、重点資質・能力に関する子どもの育ちを評価した。

7月の研修会議では「もう少し伸ばしたいところ」についてどのような授業改善を求めればよいか協議し、12月の研修会議では学級ごとの子どもの育ちや教師個々が試みている手立てを共有した。また、研究協議会では、資質・能力に関する協議に加えて個別に「西目小リフレクションシート」を作成し、授業改善につなげるようにした。

③ 重点資質・能力を支える言語力を伸ばす活動

書く力を高めるために、朝活動の「ことばタイム」において、作文を書き感想交流をする時間を設定した。また、「考えが伝わる表現力」を育むために、「ことばの力 パワーアッ

プ」と題して、身に付いた話し方を短冊等を書いて掲示し、自覚を促した。

【c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究】

(由利本荘市立岩城小学校)

昨年度に引き続き「郷土や地域に関する教育」「伝統や文化に関する教育」を通して現代的な諸課題に対応するための資質・能力を育成するために、主に以下の3点に取り組んだ。

① ふるさと教育を通じた教科等横断的な単元計画の見直し

「郷土や地域に関する教育」「伝統や文化に関する教育」を軸として、生活科及び総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・デザイン表を再考し、各教科等の学びを効果的につなぎ、習得したスキルを活用する場や地域に発信する場を単元計画に位置付けた。そして、それを基に生活科及び総合的な学習の時間の年間カリキュラム表を作成した。

② 育成を目指す資質・能力の共有化と可視化

学校で育てたい資質・能力を児童が日常的に意識できるように、図に表して各教室内に掲示した。また、重点単元等に関する学習資料、振り返りカードなどを「ふるさとマイノート」に集積して可視化し、児童の手元に置いて常時活用できるようにした。

③ 組織的なPDCAサイクルの確立と地域の人的・物的資源の活用

学校で育てたい資質・能力と整合させた学級経営計画を作成し、振り返り欄を設けて見直しを図りながら活用した。また、研究組織を、育てたい資質・能力に応じた三部会に再編成し、アンケート結果の検証をしたり具体的な施策を見いだしたりし、指導に反映させた。さらに、コミュニティ・スクールを生かして「ふるさとの宝『郷土の人材・資源』リスト」を作成し、地域の人的・物的資源を生かして学びを構築した。

(2) 成果と課題

主な成果としては、各校で育成を目指す資質・能力について会議や授業研究会等で定期的に評価・改善を行いながら、教科の枠を超えて研究を進めることができたこと、児童生徒自身も育成を目指す資質・能力を意識して諸活動に取り組むことができるようになったことが挙げられる。

主な課題としては、各校で育成を目指す資質・能力を授業を通して育成していくためのよりよい手立てを追究し続け、授業改善につなげていくことが挙げられる。これまで確立してきたPDCAサイクルを一層機能させながら、授業改善につながるカリキュラム・マネジメントを目指していきたい。

(実践地域における年間実施スケジュール)

| 月 | 取組内容 |
|-----|---|
| 6月 | ○第1回カリキュラム・マネジメント検討会議（30日） ※「手引き」作成 <ul style="list-style-type: none"> ・今年度の見通しの確認 ・各校における今年度の取組の確認 |
| 7月 | |
| 8月 | ○第2回カリキュラム・マネジメント実務者会議（28日） <ul style="list-style-type: none"> ・8月までの取組の紹介 ・手引き（令和元年度分）の読み合わせ ・今後の見通しの確認 |
| 9月 | |
| 10月 | ○第3回カリキュラム・マネジメント実務者会議（20日） <ul style="list-style-type: none"> ・10月までの取組の紹介 ・第2回カリキュラム・マネジメント検討会議の内容について ・手引き（令和元年度分）の読み合わせ ・今後の見通しの確認 |
| 11月 | ○第2回カリキュラム・マネジメント検討会議（9日） <ul style="list-style-type: none"> ・各校における10月までの取組の紹介 ・今後の予定の確認 |
| 12月 | ○カリキュラム・マネジメント事業先とのヒアリング会（2日） <ul style="list-style-type: none"> ・進捗状況の確認と今後の課題について ・情報交換 ○第4回カリキュラム・マネジメント実務者会議（14日） <ul style="list-style-type: none"> ・完了報告書の作成について ・手引き（令和2年度分）の読み合わせ |
| 1月 | ※令和2年度の成果の検証 |
| 2月 | ※研究のまとめ・完了報告書の作成 |
| 3月 | ※2年間の研究の総括 |

2. 調査研究の内容

実践校【由利本荘市立西目中学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

① 教科等横断的な視点での「創造力」の育成

年度当初の研修会で【資料1】を用い、本研究についての共通理解を図った。また、教科の枠を超えて「創造力」を育むために、【資料2】中の「総合的に考える」をはじめ、「創造力」の育成につながる項目を【資料3】のように実際の授業場面と結び付け、単元や1単位時間における指導の基本型とした。これは問題解決学習の授業展開と同じであるため、【資料4】のようなどの教科でも問題解決型の学習を意図的かつ継続的に行っていくことが、教科の目標の達成や資質・能力の伸長とともに「創造力」の育成につながることを確認し合い、実践に取り組んだ。

i) 単元の指導計画作成上の工夫

【資料2】のとおり、「創造力」の育成に関わる項目は五つある。以前は単位時間ごとに各項目を配置していたのだが、焦点化を図るため【資料5】のように変更し、五つの項目中の一つを単元全体で育てていくことや、それを拠り所として単元を構想することを確認した。

また、この捉え方を単元配当表にも反映させ【資料6】、各単元に「創造力」の重点項目を示すことで、各教科等の特性を生かしながら「創造力」の育成に向けて長期的なスパンで計画的に取り組めるようにした。

ii) 他教科等との連携による深い学び

【資料7】は、第2学年国語科「平家物語」の学習に合わせて掲示した資料である。これと関連した内容を第1学年社会科で指導する際、社会科担当教諭がこの掲示物を目にしていたことにより、授業づくりにおいて「翌年の国語科の授業につながるように」という視点が追加された。そして、学びをつなげ豊かな学びにするために、学習指導要領に示されている内容を基に、どのような視点で学習活動を展開すればよいのか等、今後の指導方法を考える契機になった。

また、第3学年の英語科担当教諭から「【資料8】のような学習をしましたが、ベトナム戦争についての授業は終わりましたか。」と話しかけられた社会科担当教諭は、その後、生徒たちがベトナム戦争についてのイメージを膨らませられるように、動画を用いて授業を行った。授業後の生徒の記述からは、教科間の学習のつながりを感じるとともに、戦争全般に対する認識を深めている様子が伝わってきた。

内容の面から教科を横断する授業を構想する場合、社会科が他教科の学習とつなげられるケースが多いことや、他教科等と連携を図る指導は特に「イメージを膨らませる」力や「総合的に考える」力を育む際に有効であることの確認ができた。

② 生徒や地域と共に育成を図るための施策と評価・改善

i) パネルの設置による意識の高揚

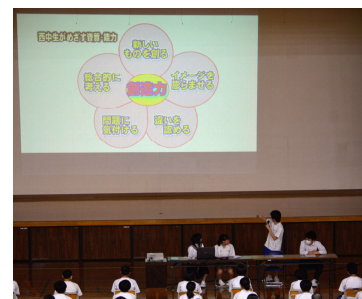
教師も生徒も「創造力」を日頃から意識することができるように、年度当初に各教室にパネルを掲示した。このことが、前期学校経営評価における「『創造力』のパネルを含め学級掲示がとも有効であった。今後も、機会に応じて触れながら指導に当たりたい。」という回答や、生徒アンケートにおける「今までは何も意識せず授業を受けていたけれども、教室にパネルが掲示されたことで、『創造力』を意識して授業に取り組むようになり、他の人の話をよく聞いたり、自分の考えをまとめたりするなどの様々な力を付けることができた。」という回答につながったものと考えられる。



ii) 生徒会活動を通じた「創造力」の育成

年度当初の集会等で、「創造力」を身に付けることが本校生徒にとって必要であることや、これまでにはない新たな取組を期待していることを伝え、「創造力」を基にした生徒会活動の活性化を図った。新型コロナウイルスの影響を受け、運動会に代わる行事を企画したり、学校祭の実施に向けて様々な方向から検討したりと、「創造力」を育む5項目の全てを発揮しながら取り組む姿が多く見られた。

特に学校祭では、生徒会長が「さらに『創造力』を発揮し、特に『問題に気付ける』『総合的に考える』『新しいものを創る』を意識して、コロナに適応した新しい西中祭を創っていこう。」という呼びかけを行ったことにより、例年になく部門を設置したり、感染症への対策を考えたりするなど、アイデアを出し合いながら取り組むことができた。



iii) 地域の人材等を活用した「創造力」の育成

新型コロナウイルスの影響により、修学旅行をはじめ多くの校外学習が中止となったが、本年度も右のように関係機関や地域の方の協力を得ながら、「創造力」の育成に取り組んだ。

国語科担当教諭からは、「書写の綿密な行書指導にはこれまで苦慮してきたが、外部講師の専門性を活用しながら指導することができた。自分の思いと字体を考えながら表現することで、思考力・判断力・表現力を発揮しながら取り組めたと言える。」との声が寄せられた。

| 内容 | 対象 | 実施月 | 実施時間等 |
|-------------|-----|-----------|-------------------------|
| 体育（ダンス） | 全学年 | 9月 | 1年5時間 2年7時間 3年9時間 |
| 国語（書写） | 2年生 | 11月 | 8時間 |
| 歯磨き指導 | 全学年 | 6, 11, 2月 | 約20分程度 年12回実施 |
| P A | 1年生 | 11月 | 2時間 |
| クロスロード | 3年生 | 11月 | 2時間 |
| こころの健康づくり教室 | 3年生 | 11月 | 1時間 |

③ 総合的な学習の時間の再編とカリキュラムの整備

昨年度末、教務会においてこれまでの総合的な学習の時間の見直しを図った。そして、以前から本校で行ってきた体験活動等の関連により、1年生は「環境」、2年生は「産業・経済」、3年生は「国際理解」をテーマに、「ESD」に向けて探究的な学習を行うことにした。

そのために、第1回研修会議で、昨年度作成した「創造力に関わるカリキュラム」上に、それぞれのテーマと関係する単元を精選しながら線で結び、他教科等との学びのつながりを全ての教員が意識できるようにした【資料9】。そして、これを基にして学年ごとに指導計画を立てた。しかし、新型コロナウイルスの影響により、総合的な学習を計画する上で柱となる職場体験学習（2年）、修学旅行（3年）の実施の可否について見通しが立たなかったり、職場見学（1年）の実

施時期が例年よりも遅くなったりしたため、計画を幾度も見直さなければならなかった。そのような中であっても、各学年部では関係機関等と連絡を取り合いながら学習を進めた。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策 (○：成果，●：課題)

- 教科等の指導をはじめ、日常生活や学校行事等の全ての教育活動を「創造力」と結び付け、生徒の意識を高めながらバランスよく育むことができた。【資料10】
- 他教科等と連携した実践を積んできたことによって、生徒が学習につながりを見だし、学習への興味・関心を高めたり、学びを深めたり、他教科等の学習で習得した技能を活用したりしている姿を目にすることが多くなった。また、教師もこのような視点で生徒の学びを捉えることができるようになった。
- 教科の枠を超えて研修し合ったことにより、「他教科であっても自分の教科と結び付けたり、自分の教科ならこうやっていけばよいのではないかと考えたりする意識が高まった」「担当教科の専門性を一層高めたい」といったような熱意やスキルアップにつながった。
- 教師・生徒ともに「創造力」を構成する五つの項目のうち「問題に気付ける」力、「総合的に考える」力を今後伸ばしたいと考えている【資料11】。特に「問題に気付ける」については、本校生徒の実態からも、学校教育全体で重点的に育成を目指す必要のある観点である。教科指導においては、課題設定までの導入の工夫や、指導過程に多面的・多角的に検討を加える場を一層充実させること。また、学校生活における諸問題に意識が働くように支援を工夫し、生徒会や学年委員による自主的・自発的な解決が図られるようにしていくこと。このような取組を計画的、継続的に行うことにより改善を図っていききたい。
- 今年度はコロナウイルスの影響で、人的・物的資源等を活用した学習を十分行うことができなかった。今後も充実した学びの機会に資する地域人材等の情報収集を進め、目的やねらいを明確にした活用を通して、地域と一体となった「創造力」の育成に取り組んでいきたい。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

| 月 | 取組内容 |
|-----|---|
| 6月 | ・教室等へ「創造力」のパネル設置 |
| 7月 | ・「創造力」についての生徒アンケート調査の実施 |
| 8月 | ・全体研修会：アンケート調査の集計・結果の考察 |
| 9月 | ・校内授業研究会①（国語，美術），研究協議会 ・学校祭，少年式に向けた地域人材の活用 |
| 10月 | ・前期学校経営評価による教育課程等の評価・改善 |
| 11月 | ・全体研修会：校内授業研究会①の成果と課題の確認 |
| 12月 | ・校内授業研究会②（理科，英語），研究協議会 ・「創造力」についての生徒，教職員アンケート調査の実施 |
| 1月 | ・全体研修会：「創造力」についての生徒，教職員アンケート調査の集計・結果の考察，校内授業研究会②の成果と課題の確認 |
| 2月 | ・今年度の研究の成果と課題の整理 ・後期学校経営評価による教育課程等の評価・改善 |
| 3月 | ・全体研修会：次年度の校内研究の提案と見直し |

実践校【由利本荘市立西目小学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

① カリキュラム・デザイン表を活用した単元等の精選と重点化

i) 単元等の精選

カリキュラムをデザインする前に、新教科書の年間単元・題材等一覧表から次の視点で単元等の精選を図った【資料1】。カリキュラムのデザインは、研修会議の場で全職員が学年部に分かれて行っているが、この精選は各学年部のみで行った。

〈視点〉

- ・生活科及び総合的な学習の時間との指導内容の関連が弱い教科等は、生活科と総合的な学習の時間から離して下方に配置する。
- ・主要4教科（低学年は3教科）以外の教科等について、重点資質・能力を育むために生活科及び総合的な学習の時間との指導内容の関連が弱いと判断できる単元・題材等は削除する。
- ・道徳は、生活科及び総合的な学習の時間に関わる内容を扱ったものと、学校の道徳教育の重点内容項目を扱った教材を残す。

ii) 単元等の重点化

上記の精選後の研修会議で、学年別のグループに分かれて、生活科及び総合的な学習の時間を核としながら教科等横断的な視点で重点資質・能力を育むために適する単元等を探り、重点化を図った【資料2】。その際、指導内容の関連を探るのではなく、重点資質・能力に基づいて関連付けること、関連付けたことを確実な実践につなげるための重点化であることを確認した。さらに、関連を図るためには、単元等の移動も考えていく必要があることも強調した。

② 生活科・総合的な学習の時間の授業実践

生活科部会では地域や地域の人々に関わる学習内容について、きらら（総合的な学習の時間）学年部会ではどのような探求課題を設定するかを話し合い、今年度の実践へつなげた。その実践が以下の通りである。

<実践例1> 2年生生活科

「きらりはっけん！町たんけん」「もっと知りたい！きらりはっけん！町たんけん」

単元の途中で、国語科「メモをとるとき」の学習を意識して見学先でメモを取る活動を取り入れた。また、国語科「こんなもの見つけた」の学習で獲得した学びを踏まえ、学習のゴールとして、探検で見たこと・感じたこと・分かったことなどを相互交流する場を設定した。その中で、子どもたちには、「実際の場面でメモを取る力」（論理的な思考力）や「伝えたいことについて分かりやすく伝える力」（考えが伝わる表現力）を付けることができた【資料3の①】。

<実践例2> 4年総合的な学習の時間 「きらきら輝け！みんなのいのち！！」

「命」についてのイメージマップ作りをし、単元を設定した。そして、子どもたちの「考えたい、体験したい」という思いを生かし、「考えよう！みんなのいのち」「やってみよう！わたした

ちにできること」「見つめよう！つながるいのち～ぼくたち・わたしたちの二分の一成人式～」という三つの小単元を構想した。

小単元1・2のまとめとして、国語科「要約するとき」「新聞にまとめよう」での学びを生かし、自分の考えを新聞にまとめる活動と、この新聞を用いて自分の考えを発信し意見交流する「いのちの発表会」を設定した。新聞作りでは、グループのテーマに沿い、「自分には何ができるのか」を考えながら、図書資料で調べたことや家族にインタビューしたことなどを加え、体験したことを基にして読み手に分かりやすく表現することができていた【資料3の②】。



③ 長期・短期のPDCAの連続的な展開

i) 学習指導案における重点資質・能力の可視化と自覚化

コロナ禍により指定校訪問（理科，図画工作科，特別活動）のみの授業研究会となったが，それぞれの教科等において，教科等横断的な関連を図って単元を構築した。学習指導案は，昨年度までの形式をベースにしなが，重点資質・能力と単元の資質・能力の関連の可視化【資料4の①】と関連する単元間の資質・能力の可視化【資料4の②】を意図して，変更した。

ii) 重点資質・能力と重点単元等の評価・改善

7月と12月の研修会議で，重点資質・能力に関する子どもの育ちを評価した。7月の研修会議では，「もう少し伸ばしたいところ」についてどのような授業改善を求めていけばよいか，三つの資質・能力ごとに分かれて協議した。12月の研修会議では，「概念化シート」を使用し，学級ごとの子どもの育ちや教師個々が試みている手立てを共有した【資料5の①】。

また，重点単元に取り組んだ成果と課題や留意点等を次年度へ向けて蓄積したいと考え，7月，12月に評価して記録に残すようにした【資料5の②】。

iii) 研究協議会での重点資質・能力に沿った評価・改善と教師個々の省察

研究協議会は，ワークショップ型でマトリックス法を用いて行い，「子どものどんな姿に重点資質・能力の育ちが見られたか」「もう少し伸ばしたいところとしてはどんな姿があるか」という2点について協議・検証した。また，重点資質・能力を育むための意識を継続的に共有し授業改善につなげるために，「西目小リフレクションシート」を作成し，個人の省察の場とした【資料5の①写真4】。

④ 重点資質・能力を支える言語力を伸ばす活動

i) 「ことばタイム」の書く力を高める取組

朝活動の「ことばタイム」（20分間）において，作文を書き感想を交流する時間を設定した。国語科で身に付けた力を活用・発揮するような作文を書くことを共通理解した【資料6】。

ii) 話す力を伸ばす「ことばの力 パワーアップ」の取組

「考えが伝わる表現力」を育むために，「ことばの力 パワーアップ」と題して，身に付いた話し方を短冊等を書いて掲示し，自覚を促した。

6年生については，学級活動を取組のきっかけとしたところ，2～3日中の学習内容を見通し

て意識すべき話し方に付箋を貼って共有するなど、工夫して取り組むことができた【資料7】。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策 (○：成果，●：課題)

- 教科等横断的な視点で教育課程を編成することによって、学習したことが他教科や生活へ活用できるという学びのよさを、子ども自身が感じるようになった。さらに、そのよさが特定の教科等や技能的な側面にとどまることなく、広がりや深まりを感じられるようになった。
- 学校として「学習の基盤となる資質・能力」を設定したことによって、その資質・能力を基に評価・改善を定期的に行うこととなり、全職員が同じ方向で研究を進めているという意識が高まった。
- 「ことばタイム」など形骸化していた活動について、「学習の基盤となる資質・能力を育成する」という視点から見直しや修正を図ったことで、改めて学校教育目標を実現するための方策として共有できた。
- 「学習の基盤となる資質・能力」の育ちを評価していくことと授業改善とのつながりが不十分である。各教科等の特質に応じて「学習の基盤となる資質・能力」を発揮している子どもの姿を具体化する必要がある。
- 教科等横断的に関連させて指導することが目的化してしまうことがあった。それぞれの教科等のねらいの違いは何か、教科等横断的な視点で関連させて学習することがどのように有効なのかを考える必要がある。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

| 月 | 取組内容 |
|-----|--|
| 6月 | 第3回研修会議：本調査研究の概要の共通理解 「西目っ子の学びアンケート」①による実態調査実施 |
| 7月 | 第4回研修会議：学年部ごとの重点とする資質・能力の評価 授業改善の方策の検討 |
| 8月 | 第5回研修会議：重点単元の評価・夏休み明け以降の重点単元の見直し |
| 9月 | 単元構想会（2年図工科，3年理科，6年学級活動） |
| 10月 | 指導案検討会（2年図工科，3年理科，6年学級活動） |
| 11月 | 授業研究協議会（指定校訪問）（2年図工科，3年理科，6年学級活動） ：提案授業より三つの資質・能力の育ちの検証 学級ごとの三つの資質・能力に沿った育ちを省察 |
| 12月 | 第7回研修会議：三つの資質・能力に沿った子どもの育ちと手立ての共有 夏休み明け以降の重点単元の評価 「西目っ子の学びアンケート」②による実態調査実施 |
| 1月 | 第8回研修会議：県学習状況調査誤答分析，授業改善立案 研究紀要原稿による成果と課題の共有 |
| 2月 | 第9回研修会議：重点単元等の成果と課題の共有 三つの資質・能力に沿った子どもの育ちの年度末評価 |
| 3月 | 第10回研修会議：今年度のまとめ，次年度の方向性の共有 |

実践校【由利本荘市立岩城小学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- ☑ c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

新たな学校教育目標「ふるさとに誇りをもち、たくましく生き抜く子どもの育成」の具現化を目指し、地域に開かれた学校づくりを進めている本校の特色を生かした教育課程において、本校で育てたい資質・能力「他と関わる力」「豊かな言語力」「判断する力」の育成を図る。その上で、「郷土や地域に関する教育」「伝統や文化に関する教育」を通して、現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けて研究を推進していくこととした。

(2) 調査研究の内容

① ふるさと教育を通じた教科等横断的な単元計画の見直し

i) 生活科及び総合的な学習の時間年間カリキュラム表の作成

「郷土や地域に関する教育」「伝統や文化に関する教育」を軸として、生活科及び総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・デザイン表【資料1】を再考し、各教科等の学びを効果的につなぎ、習得したスキルを活用する場や地域に発信する場を単元計画に位置付けた。それを基に生活科及び総合的な学習の時間の年間カリキュラム表【資料2】を作成し、活用する地域の人的・物的資源を明記して、見通しをもって取り組めるようにした。

また、実践過程において、児童の実態を踏まえ、【資料1】と【資料2】について再考し、変更点を直接書き込んだ。8月と12月には、成果や課題として捉えた本校で育てたい資質・能力における児童の姿を付箋紙に書き込み、年間カリキュラム表に貼って可視化し、意識化、実践化を図った。

ii) 主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善

本校で育てたい資質・能力と単元で育む資質・能力との関連性を捉え、その中から重点とする資質・能力を明確にした【資料3】。そして、授業研究協議会において児童の姿で検証し、成果や課題、手立てについて共有化を図った。



また、児童のふるさとに対する思いや気付きの質を高めることができるよう、【資料1】や【資料2】を基に大単元を構成した。さらに、児童の思考の流れを想定して単元や題材の内容、時間のまとまり等を見通して小単元を構成し、取り上げたい地域の学習素材を明確にした【資料4】。そして、単位時間における本校で育てたい資質・能力が育まれた児童の姿を明確にして実践を積み上げた【資料5】。

iii) 秋田県NIE推進協議会NIE実践指定校としての取組を生かす

学校教育計画に「NIE計画」を位置付け、毎週金曜日の朝活動において全校一斉に新聞を活用した教育活動に取り組み【資料6】、各学年の児童の実態に応じて段階的、計画的に深めた。取組の様子を教室内やNIEコーナーで紹介し、新聞や社会の出来事への興味・関心を高め、物事を多面的・多角的に考えられるようにした。また、各教科等の学びと関連を図



り、社会やふるさとに対する見方・考え方を育み、言語力を豊かにするようにした。

② 育成を目指す資質・能力の共有化と可視化

i) 本校で育てたい資質・能力の意識化を目指した環境整備

児童が資質・能力を日常的に意識し、自らよりよい生き方について考えながら生活していく姿を目指し、「発達段階に応じた本校で育てたい資質・能力」を図に表し【資料7】、各教室内に掲示した。また、児童一人一人が資質・能力に応じた期別のめあてを立て、月ごとに振り返るカードを教室内に掲示して児童の実践化の後押しをするとともに、児童一人一人がめあてを達成できるように教職員が的確に関わるようにした。

ii) 「ふるさとマイノート」の活用

生活科や総合的な学習の時間の重点単元等に関する学習資料、振り返りカード【資料8】などを「ふるさとマイノート」に集積して可視化し、児童の手元に置いて常時活用できるようにした。朱書きによって児童へフィードバックを図り、ふるさとに対する思いや気付きの質を高め、学びの手応えをより実感して次へつなげられるようにした。

③ 組織的なPDCAサイクルの確立

本校で育てたい資質・能力の全体図と整合させた学級経営計画を作成し【資料9】、振り返り欄を設けて見直しを図りながら活用した。

また、研究組織を、育てたい資質・能力に応じた三部会に再構成した。そして、育てたい資質・能力に応じた「いわきっこまなびのアンケート」を用いて、児童と教職員（年3回）、保護者（年2回）を対象に行ったアンケート結果の検証をしたり、期別ごとに児童の実態を踏まえて具体的な施策を見いだしたりし、指導に反映させた。

④ コミュニティ・スクールを生かした地域の人的・物的資源の活用

教職員で地域の学習素材巡りを行い、学校運営協議会や行政等と連携して小・中学校合同の人材バンク「岩城小・中地域協力隊」の募集に取り組み、「ふるさとの宝『郷土の人材・資源』リスト」を作成した【資料10】。それを基に、学校支援コーディネーターを通して協力を依頼し、地域の人的・物的資源を生かして学びを構築した。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策（○：成果，●：課題）

- 学校教育目標の見直しを図ったことにより、「郷土や地域に関する教育」「伝統や文化に関する教育」という軸が明確になり、全ての教育活動が繋がった。そして、研究組織や学級経営計画と本校で育てたい資質・能力との整合を図り、保護者やCS学校運営協議会等、地域を巻き込んで効率的にPDCAサイクルを機能させたことにより、指導に反映することができた。また、授業研究協議会において、本校で育てたい資質・能力について児童の具体的な姿で検証することを通して、手立てを見だし、共通理解を深めることができた。
- 本校で育てたい資質・能力について可視化を図り、児童と共有し、目指す資質・能力との関わりの中で三つの合い言葉（「いのちを守る岩城小」「われを磨く岩城小」「きづいて動く岩城小」）に表し、日常の教育活動の様々な場面に取り入れたことにより、児童も目的意識をもってカリキュラム・マネジメントに取り組むことができた。
- 生活科や総合的な学習の時間の年間カリキュラム表を作成して各教科等の学びを効果的につなぎ、「ふるさとの宝『郷土の人材・資源』リスト」を基に学びを構築し、「ふるさとマイノート」の活用やNIEとの関連を通して学習活動の充実を図ったことにより、児童が学んだこと

を自分事と捉えて気づきを深め、郷土や地域のよさを再確認していた。

- 「郷土や地域に関する教育」「伝統や文化に関する教育」を軸に据え、生活科や総合的な学習の時間を核とした教科等横断的な学びにおける資質・能力の関連性の妥当性について児童の姿から評価し、習得したスキルを活用する場を明確にして、より効果的に学びがつながるようカリキュラムの改善を図っていく。
- 中学校と連携し、9年間のスパンにおける資質・能力の育成を視野に入れ、本校で育てたい資質・能力と単元を通して育てたい資質・能力との関連性を捉えて実践を積み重ね、資質・能力を育むための手立てを見いだしていく。
- 他機関と連携を図り、小学校、中学校合同の人材バンク「岩城小・中地域協力隊」の募集に取り組み始めたところである。今後は、より積極的に働きかけて人材バンクを整え、教育活動のニーズに合わせてスムーズにアクセスできる体制を作っていく。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

| 月 | 取組内容 |
|-----|---|
| 6月 | ・特別支援教育セミナーⅠ ・第1回CS学校運営協議会 |
| 7月 | ・「学校教育に関するアンケート」①（保護者対象）実施 ・教科等訪問：「社会科」「家庭科」授業研究協議会 ・要請訪問Ⅰ：「理科」「総合的な学習の時間」授業研究協議会 ・資質・能力三部会：アンケートの結果検証及びⅢ期の施策について検討 |
| 8月 | ・ミニ研修会：地域の学習素材巡り ・研修会議：前期前半の振り返りと今後の取組について再考 |
| 9月 | ・特別支援教育セミナーⅡ ・「いわきっこまなびのアンケート」②（児童・教職員対象）実施 |
| 10月 | ・研修会議：全国学力・学習状況調査結果分析及び今後の取組について検討 前期後半の振り返りと今後の取組について再考 ・資質・能力三部会：アンケートの結果検証及びⅣ期の施策について検討 |
| 11月 | ・第2回CS学校運営協議会 ・要請訪問Ⅱ：「社会科」「生活科」「総合的な学習の時間」授業研究協議会 ・「学校教育に関するアンケート」②（保護者対象）実施 |
| 12月 | ・市教委授業力向上訪問：「国語科」「算数科」「外国語科」授業研究協議会 ・「いわきっこまなびのアンケート」③（児童・教職員対象）実施 ・研修会議：後期前半の振り返りと今後の取組について再考 ・資質・能力三部会：アンケートの結果検証及びⅤ期の施策について検討 |
| 1月 | ・研修会議：県学習状況調査結果分析及び今後の取組について検討 |
| 2月 | ・第3回CS学校運営協議会 ・研修会議：後期後半の振り返り、資質・能力及び重点単元等の検討 |
| 3月 | ・研修会議：今年度の成果と課題の共有、次年度の見通し |

3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

(○：成果，●：課題)

- 各校で育成を目指す資質・能力について，児童生徒自身が意識して諸活動に取り組むことができるようになった。その要因としては，資質・能力を図式化して教室に掲示したり，振り返りカードに連動させたり，身に付いた話し方を教室に掲示したりするなど，各校で手立てを工夫したことが挙げられる。
- 各校で育成を目指す資質・能力に照らして諸活動における児童生徒の姿を見取り，会議や授業研究会等で定期的に評価・改善を行ったことが，全教職員が教科の枠を超えて同じ方向で研究を進めることにつながった。
- カリキュラム・デザイン表，生活科及び総合的な学習の時間の年間指導計画，学習指導案や単元計画等を見直すことが，「教科等横断的な視点で教育課程を編成すること」や「各校で育成を目指す資質・能力と各教科等で育成する資質・能力との関連」の捉え直しにつながり，各校でよりよい方法を求めて工夫・改善することができた。
- 「教科等横断的」が目的化してしまったり，内容のつながりに重きを置いた教科等横断になってしまったりすることがある。迷ったときは「子どもたちに資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントである」という原点に立ち戻り，資質・能力のつながりを重視して，教科等横断的な視点での教育課程編成に当たっていききたい。
- 各校で育成を目指す資質・能力は，学校教育全体を通して育成していくものではあるが，特に授業の中でどのようにして育成していくのか，よりよい手立てを今後も追究し続け，授業改善につながるカリキュラム・マネジメントを目指していききたい。